学校法人 福島成蹊学園
福島成蹊中学校･高等学校
令和５年 11 月１日　NO.14
文責　校長　本田　哲朗

一 貫 コ ー ス 通 信

戻って来た海外研修旅行(ビクトリア市研修の巻頭文から)

時代は国際化の最中にあります。世界の人口も 80 億人を上回り、今般のコロナパンデミックも含め、一国レベルで解決できる問題など無い時代の到来と言って良いかも知れません。この様な状況下で、次代を担う世代に求められる大切なものは何かを考えると、国際理解を希求する“こころ”が挙げられます。これを踏まえ、一貫コースは卒業までに“洋の東西文化”に触れる事を旨として来ました。

現在、本校はカナダ・ビクトリア市に在る“St・Andrew's Regional High School”と姉妹校提携を結んでいます。この事は福島成蹊学園に取り歴史的に初めての事であり、とても意義のあることの一つです。生徒諸君には、学校交流の機会を通じ、今後の世界情勢の中で、相互に理解し合える関係の構築とは何かを考えて欲しいと願っています。

ところで、現在の五千円札の肖像は作家“樋口一葉氏”で在りますが、来年には津田塾大学の創始者“津田梅子氏”に代わります。それでは一つ前はと問われたら、中々名前は出てこないのではないでしょうか。因みに本県で有名な国際人と言えば先ず“野口英世博士”や“朝河寛一博士”が浮かびますが、先代の肖像画は偉大な国際人“新渡戸稲造博士”です。ここで、研修地でもあるビクトリア市と博士の関係について稿を割かせて下さい。文明が進み、現在では 10 時間足らずで太平洋を飛び越えられる様になりました。しかし、140 年前には、その事自体が叶わなかったのです。従って“異文化体験”を一人の“人格が残した精神に触れる形で体験した青年がいます。その一人が南部藩(現在の盛岡市)出身である新渡戸稲造博士です。彼は生徒とほぼ同年齢の時に札幌農学校（現在の北海道大学）に入学し、米のアマースト大学から招聘された“ウイリアム・クラーク”の遺産、“be a gentleman”と“boys be ambitious”…の言葉に接しました。その事でクラークのスピリットを受け継ぐ一人になったのです。後に、国内では初代東京女子大学学長に就任し、国外に於いても第一次世界大戦処理のベルサイユ会議にも加わり、日本人初の国際連盟事務次長に任じられました。また、日本統治時代の台湾に於いても精糖技術の殖産を指導し、経済的自立を促しました。時に、1933 年、カナダ・バンフに於ける太平洋問題調査会議の帰途、研修地でも在るカナダ・ビクトリア市で逝去して居ます。思うに、新渡戸青年の人生を決定づけたのは、他ならぬ札幌農学校での異文化体験にあると言って過言ではありません。

コロナパンデミックに僅か２年の年月で mRNA ワクチンが実用化された事は驚異ですが、お陰で本校でも海外研修旅行が戻って来ました。又、9 月にはワクチン基礎研究の功績で 2 名の科学者がノーベル医学生理学賞を受賞しましたが、こう言った背景にも関心を持って下さい。生前、新渡戸博士が残した“**願わくは、我太平洋の橋とならん**”の言葉(思い)が在ります。つき詰まる所、外交や医学の基礎研究も人類への貢献が、ヒトの真価なのだと思います。